

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 3 日現在

機関番号：14201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2013

課題番号：21530682

研究課題名(和文) 絵本の選択がADHD児の読み聞かせに及ぼす効果についての研究

研究課題名(英文) The Effect of Selection of Books on Picture Book Reading for The Children with ADHD

研究代表者

近藤 文里 (KONDO, FUMISATO)

滋賀大学・教育学部・教授

研究者番号：00133489

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円、(間接経費) 810,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ADHD児に対する絵本の読み聞かせで絵本の選択の効果を検討したものである。実験では、発達年齢で2歳台から5歳台のADHD児を用い、集団での読み聞かせ場面をビデオ録画した。そして、子どもの視点、発話、動作の詳細な分析にもとづいて、読み聞かせ中の注意機能を調べた。

その結果、一場面で1つのエピソードが完結する絵本は、連続場面で物語が構成される絵本よりも注意を集中しやすいとは必ずしも言えないこと。次に、1回目の読み聞かせで注意を集中させることができなくても、再度同じ絵本を読み聞かすことで、注意できるようになること。さらに、絵本におけるオノマトペの効果は4つあること、が明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This study investigated the effect of books on picture-book reading for the children with ADHD. In experiments, children with ADHD whose developmental age ranged from 2 years old to 5 years old were used, and scenes of storytelling for group were recorded. And then, based on detailed analyses of children's visual point, utterance, and movement, the function of attention during storytelling was examined.

The results were as follows. At first, it can't be always necessary to say that children more easily pay attention to a picture book in which one scene consisted of an episode than that of a story which is constructed in consecutive scenes. Second, though the child who can't pay attention to storytelling at first time, the child can pay attention by reading the same book once again. Moreover, it was clarified that there were four effects of onomatopoeia in picture-book.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：発達障害 ADHD 絵本 読み聞かせ

## 1. 研究開始当初の背景

今日、保育園や幼稚園においては、絵本の読み聞かせは重要な実践になっている。しかし、多くの子どもを集めた集団場面での読み聞かせ過程を検討した研究は必ずしも多くなかった。また、それにも増してADHD児(注意欠陥・多動性障害児)を対象とした研究は極めて少なかったと言える。

ADHDの特徴をもつ子どもは絵本に注意を集中させて聞くことができず、長年読み聞かせを実践している教師でもどのように対処してよいか悩むことも多かった。彼らを対象とした読み聞かせを実現することは、実践的には重要な課題であったにもかかわらず、研究の課題として取り上げられることがほとんどなかったと言える。

しかし、ADHDを含めて発達障害の有無にかかわらず、幼児期に絵本の読み聞かせを楽しめることは、小学校に入学してから生活や学習にしっかりと定位置していきうえで非常に重要なものである。なぜならば、幼児期に人の話を「注意して聞ける」ことは非常に重要であるし、注意の持続において困難をかかえるADHD児には特に重要な発達課題であることが分かっているからである。

筆者らは、このような背景をもとに、平成18年度から平成20年度にかけて科学研究費の補助を受けて「絵本の読み聞かせに関する基礎研究とADHD児教育への応用」と題とする研究を行い、多くの成果を得ることができた。そのなかでも、今後明らかにしなければならぬ課題として考えたことが絵本の選択に関する問題であった。

子どもが絵本の読み聞かせに集中できるかどうかを決める要因には、読み手の側の要因と聞き手の側の要因がある。従来の絵本の読み聞かせに関する研究は、主にこの2つの要因について検討することが中心であった。しかし、絵本それ自体がもつ特性が読み聞かせに及ぼす効果について実証的に検討することは、ほとんどなかったと言える。例えば、一場面で1つのエピソードが完結するような絵本と、連続的な物語の展開で構成される絵本の違いが子どもの物語理解に及ぼす効果については、必ずしも十分に検討されたことはなかった。また、絵本にはオノマトペを用いた表現がしばしば認められるが、そのようなオノマトペは、ADHD児の読み聞かせではどのような効果を発揮するのか、といった検討も必要である。さらに、絵と文の意味的関連性の強さが絵本の読み聞かせに及ぼす効果について検討することも重要な課題であると言える。

## 2. 研究の目的

本研究は、集団を対象とした絵本の継続的な読み聞かせ場面において、次の4点を明らかにすることを目的としている。

第1の目的は、一場面完結型の絵本か、物語展開型の絵本かでどのような効果がAD

HDを対象とした絵本の読み聞かせであられるのかについて検討する。

第2の目的は、絵本のオノマトペ表現がADHD児の読み聞かせでどのような効果を発揮するのかについて検討する。

第3に、絵と文の意味的関連性の強さが絵本の読み聞かせに及ぼす効果について検討する。

第4に、絵本の選択に関する上記の検討とあわせて、繰り返し絵本を読み聞かせることの意味について検討する。この理由は、発達障害児を対象とする場合は、注意機能の他にもワーキング・メモリに弱さが考えられるからである。

## 3. 研究の方法

### (1) 調査対象

聞き手はA通園教室に通うADHD児であり、発達年齢は2歳8か月から5歳8か月の11名である。読み手は小学校で長い読み聞かせ経験がある現職の教員が行った。A通園教室で計23回の読み聞かせを行った。

読み聞かせに用いた主な絵本は、『たまごのあかちゃん』、『あかちゃんあそばさあつぷつぷ』、『はじめてのぼうけん1 ぴよーん』、『もこもこもこ』、『うずらちゃんのかくれんぼ』、『ないしょ ないしょ』、『三びきのやぎのらがらどん』、『あかたろうの1・2・3の3・4・5』、『おにがでた』、『きたきたうずまき』、『でんしゃにのって』、『ごろごろにゃーん』である。

読み手と聞き手の位置関係は、聞き手は絵本の見える範囲で扇形に椅子に座り、読み手は低い椅子(聞き手と同じ椅子)に座って読み聞かせを行った。読み聞かせは、聞き手が全員椅子に座った時点で始めた。

読み聞かせの様子はビデオで録画した。分析は時間見本法により聞き手に関する行動指標に基づいて行った。タイムサンプリングの時間単位は15秒毎である。15秒単位で各分析カテゴリーにおける行動指標の出現頻度を集計するが、同一の行動指標が15秒内に複数回出現しても「1」とカウントする。また、同じ15秒内に異なる行動指標の反応が出現した場合には各々の行動指標に該当する反応が各1回出現したものとす。

分析カテゴリーは、「視点」、「発話」、「動作」の3項目である。また、各々の項目については具体的な行動指標を設けた。分析カテゴリー「視点」、「発話」、「動作」の3項目に属する行動指標は以下の通りである。

まず、「視点」に関しては、読み聞かせの過程で一人ひとりの子どもがどこを見ているのかを分析する。つまり、<絵本や読み手を見ている>、<他の子どもを見ている>、<それ以外を見ている>に該当する反応生起率をとらえる。

また、「発話」に関しては、<絵本の内容に関連した意見表出>、<絵本に関係のない独り言>、<感情表出を伴う発声>、<友達

と絵本に関係することで話し合う>、<友達と絵本に関係のないことで話し合う>に該当する反応生起率をとらえる。

さらに「動作」に関しては、<感情の身体的表現>、<多動傾向を示す動作>、<対象的操作を伴う動作>、<絵本の内容を理解した行動変化>、<絵本への関心を示す動作>、<絵本への拒否や無関心を示す動作>を区別して生起率をとらえる。

なお、分析期間は、表紙から裏表紙までの間であり、この間に生起した行動指標の生起率を算出する。

これ以外の分析として、絵本の場面ごとに聞き手の発話内容について検討した。これによって、子どもが絵本の内容をどの程度理解しているのかを明らかにすることができる。同様に、絵本の場面ごとの感情表出頻度とその推移をとらえた。この分析によって、子どもが絵本のどの場面に感情の高まりがみられるのかを明らかにできる。

#### 4. 研究成果

##### (1) 物語構成で異なる2タイプの絵本

本研究の第1の目的であった一場面完結型の絵本とストーリーがある物語展開型の絵本の比較では、一場面完結型の方が注意を集中するとは必ずしも言えなかった。絵本に楽しめる要素があれば一場面完結型の絵本であってもストーリーがある継時的な絵本であっても楽しむことができる。このことは対象とした被験児全員について言えることであった。ADHD児は読み聞かせの環境に容易に影響されるものの、全く聞いていないのではなかった。彼らは局外刺激に転導されやすいという弱さをもちながらも、絵本の読み聞かせに積極的に参加しようとしていることが明らかになった。

次に、被験児毎に最も楽しめる絵本は何かという視点から分析してみた。つまり、一場面完結型の絵本の方が楽しめる聞き手と、ストーリーがある継時的な絵本の方が楽しめる聞き手、さらには、両方の絵本を楽しめることができる聞き手、に分けるとすれば次のような傾向が認められた。

まず、発達年齢が2歳8か月のA児は絵本に楽しめる要素があれば一場面完結型の絵本でも継時的な絵本に関係なく楽しむことができた。しかし、絵本に楽しめる要素が含まれていなければ継時的な絵本の内容を理解することは困難であった。したがって、A児は概して一場面完結型の絵本の方がより楽しめる段階にあると考える。

次に、発達年齢が5歳4か月と高いB児やC児は、一場面完結型の絵本もストーリーがある継時的な絵本も絵本の内容を理解して楽しむ力があつた。しかし、「視線」や「発話」に関する分析から、一場面完結型の絵本の読み聞かせの時は絵本それ自体を楽しむというよりも友達が楽しんでいる姿を見て楽しむという余裕が認められた。しかし、こ

のような余裕は結果的には注意の転導につながるものがしばしば認められた。一方、ストーリーがある絵本では物語の流れを理解することに注意を集中させたために、絵本以外への転導性は認められなかった。このようなことから、B児やC児はストーリーがある継時的な絵本の方をより楽しむ段階にあると推測された。

これらの結果は、一場面完結型の方が注意を集中するとは必ずしも言えなかったが、発達年齢別の検討では、発達年齢が高くなるにつれて一場面完結型の絵本から、物語がある展開型の絵本の方をより楽しむようになる、と考えられる。

##### (2) 絵本に用いられるオノマトペの効果

絵本におけるオノマトペの働きは、4つあることが明らかになった。それらは、以下の通りである。

まず、第1は、オノマトペは場面の絵(視覚)に音(聴覚)を対応させるうえで感性的に最も適合した言葉になっていることである。このような効果は、ADHD児の読み聞かせの理解を促進するうえで大きかった。

第2は、人や物の変容について、運動や時間をうまく表現するうえでオノマトペが使われていることであった。

第3は、意味的にまとまりがあるエピソードの区切りにオノマトペが用いられていること。これは、1つのエピソードが終わり、区切りがついたことを示す働きがあつた。

第4は、同じオノマトペの繰り返し背景の音楽効果をつくりだし、状況がはらむ雰囲気などを伝える働きがある。

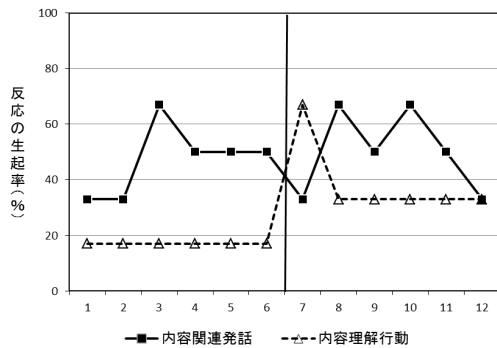
##### (3) 絵と文の意味的関連性

ADHD児は絵と文の意味的関連性が低い絵本ほど「視点」の分析で絵本や読み手を見ている頻度が低下した。また、「動作」の分析においても多動傾向を示す動作の頻度が高くなることが認められた。このことから、絵と文の意味的関連性が低下するほど、ADHD児は絵本や読み手を見る傾向が低下し、多動傾向が増大することが明らかになった。

##### (4) 繰り返し読み聞かせることの意味

研究の結果、繰り返し2回読むことで、2回目は1回目よりも聞き手の反応がよくなることが認められた。それは認知面だけでなく感情面についても、連続して読み聞かせることで、1回目よりも多くの聞き手で感情の表出が認められた。また、1回目では面白いと思えなかった場面でも2回目は面白いととらえている反応が認められた。

Fig.1は、絵本『もこもこもこ』を2回読み聞かせたときの<絵本の内容に関連した意見表出>('内容関連発話'とした)と、<絵本の内容を理解した行動変化>('内容理解行動'とした)という行動指標に関する反応生起頻度の推移を示したものであるが、概して1回目の読み聞かせに比べると、2回目の方が絵本の内容理解が高まっていることが認められる。



1から6までが1回目、7から12までが2回目の読み聞かせ

Fig.1 1回目・2回目の内容理解に関連した発話と動作

また、「感情の表出」と「感情の身体化」についても、場面の推移につれてどのような生起頻度が見られるかを分析したところ、2回目の反応の方が顕著な感情の表出と身体化が認められた。

それでは、このような1回目から2回目への変化はどのような背景から生じたのだろうか。それは、おそらく1回目の読み聞かせによって図式 (schema) が形成され、この図式が2回目の読み聞かせを理解するプランとして機能したと思われる。このことは予期という点でも聞き手の認知を方向づける働きをし、注意という点でも選択的な注意を促すものとなったと考えられる。

このことは局外刺激への転導性をもち、注意の持続に困難をもつADHD児を対象とした読み聞かせ実践を考えるときに重要である。つまり、局外刺激に容易に転導し、注意の持続に困難をもつ子どもを対象に絵本の読み聞かせをする場合は、ひと通り最後まで読み聞かせたということで次の絵本の読み聞かせに移行してよいのかという問題とも関係している。読み手は聞き手の読み終わった時の子どもの反応を敏感にとらえて、場合によっては繰り返して読むことも選択肢の1つに入れておく必要があることを示唆している。

**(5) ADHD児の読み聞かせで留意すべき事項**

発達障害児を対象とした絵本の読み聞かせでは、読み手はいろいろな配慮をしなければならないことが明らかになった。

そのなかで、今回の研究で特に気づいた問題を1つあげることとする。それは、集団を対象とした場合に、特に注意しなければならないことであるが、絵の細部への注意を促す工夫をすべき点である。絵と文の意味的関連性は重要であることは既に述べたが、絵本の中には文で述べられている人や動物や物が小さく描かれていることがある。また、大きく描かれたり、小さく描かれたりするようなこともある。このような場合、発達年齢が比較的低い子どもの場合は特にそうであるが、「細部への注意」ができないことがあり、絵本の内容理解に支障になる場合がある。

このような場合は、読み聞かせの間であっても、読み手は聞き手が見逃しやすい小さな刺激などを指で指し示す等の配慮が必要であることが示唆された。

**5. 主な発表論文等**

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

近藤文里・辻元千佳子 2011 絵本の選択がADHD児の読み聞かせに及ぼす効果(1) これまでの研究の総括と今後の課題 . 滋賀大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 19巻, 9-15.

近藤文里・辻元千佳子 2010 絵本の選択がADHD児の読み聞かせに及ぼす効果(2) 今後の研究の課題と方法 . 滋賀大学教育学部紀要, 60号, 37-49.

近藤文里・辻元千佳子 2011 絵本の選択がADHD児の読み聞かせに及ぼす効果(3) 物語の構造が異なる2種類の絵本への反応 . 滋賀大学教育学部紀要, 61号, 1-13.

近藤文里・辻元千佳子 2012 絵本の選択がADHD児の読み聞かせに及ぼす効果(4) 繰り返し読み聞かせることの意義について . 滋賀大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 20巻, 9-15.

近藤文里・辻元千佳子 2012 絵本の選択がADHD児の読み聞かせに及ぼす効果(5) 絵本におけるオノマトペの作用 . 滋賀大学教育学部紀要, 62号, 15-29.

[学会発表](計0件)

[図書](計0件)

[産業財産権]  
出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

[その他]  
特になし

**6. 研究組織**

(1)研究代表者  
近藤 文里 (KONDO FUMISATO)  
研究者番号: 00133489

(2)研究分担者  
なし

(3)連携研究者  
なし